❶ 猫山
ねこやま

化け猫伝説で有名な猫山。
猫山の名を冠する「ネコヤマヒゴタイ」の自生地
→P34参照

小奴可
おぬか

小奴可の中の小奴可。
駅もある、現代の中心部

❸ 板井谷のたたら跡とカツラ
いたいだにのたたらあととかつら

たたらの守護神である金屋子神社の前にある大カツラ。カツラはたたらの神木とされることから民俗的意義が大きい。庄原市指定天然記念物。

❷ 魔除け観音
まよけかんのん

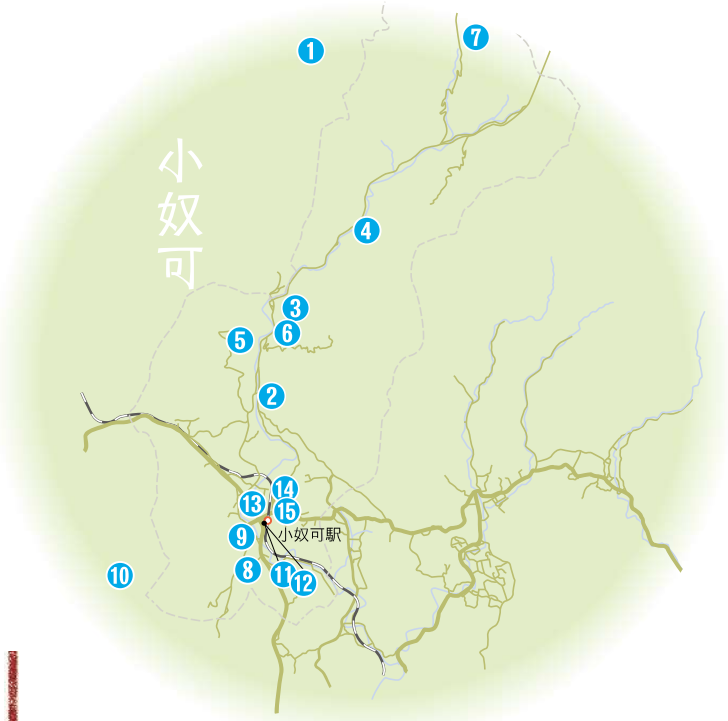
寛政年間（1789～1800）、猫山山麓一帯の地域は大飢饉だった。当時、人々は猫山から悪運の魔が差して襲っていると言って恐れていた。これを憂えた栃木の柳生定十郎、中井納の助三郎、後田の甚右衛門の三名が、悪魔退散を念じて大きな天然石に観音像を刻み込み、建立、難を逃れたという。元は割り渡りの寺迫道沿いに猫山に向かって建てられていた。

❻ 太刀洗観音
たちあらいかんのん

昔武士が刀に付いた血を洗い流したことからこの名が付いたと思われる。近くには武士の墓もある 。

❼ 成羽川源流
なりわがわげんりゅう

道後山の麓 持丸川は岡山を下って瀬戸内海に注ぐ成羽川の最源流部である。



❹ 板井谷のコナラ
いたいだにのこなら

樹齢約300年と推定される。樹下にたたらの防火の神として祀られた愛宕神社の祠がある。広島県天然記念物。

❺ 小奴可発電所
おぬかはつでんしょ

昭和37年に作られた小水力発電所

奴可入道西寂の墓?とも

❽ 亀山城
かめやまじょう

平安末期の頃、奴可入道西寂（さいじゃく）の居城であったと伝えられる。その後、奴可四郎、奴可源吾、奴可平四郎、飯田新助と続き、戦国期の天文（1532～1554）の頃には山陰尼子氏の家臣・亀井茲経（なりつね）が居城したという。初め亀山城といったが、当時ここに亀に似た石があったので亀石城と呼ばれた。その石が夜な夜な光を発するのでこの石を割り、三十四間四方に築き上げた天満宮を勧請した。よって亀割城と呼ばれるようになった。

奴可入道西寂って?
ぬかにゅうどうさいじゃくって?

治承5年（1181）、伊予の国・高縄城（愛媛県北条市）に　源頼朝に味方して立てこもっていた河野通清を、平氏の命により奴可入道西寂が攻め殺した。その後、鞆に凱旋した西寂は、そこで戦勝の祝宴を開いたが、前後も分からないほど酔ったところを通清の嫡子通信に襲撃されて、生け捕りにされたまま高縄城に連れて行かれた。そして通清の墓前で処刑されたという。（平家物語より）尚、奴可入道の墓と伝えられている物が小寺の上にある。

小奴可地形
おぬかちけい

小奴可地域でよく見られる地形で、山麓の緩い斜面に急傾斜の小山が孤立して点在する地形のことである。このような地形は、世界的には乾燥地帯に特徴的にみられるもので、それが湿潤気候の日本に発達しているのは珍しいと、地名をとって「小奴可地形」と呼ばれた。しかし、実際は、たたら製鉄にともなう砂鉄採取のための鉄穴（かんな）流しによって、形成された鉄穴残丘（かんなざんきゅう）である。砂鉄を選別するために土砂を崩して流す際、大きな岩などがあったりして堀り残されて、丘状に残ったもので、人工的に改変された地形である。丘の上に水神などが祀られていることも多い。

❾ 摩利支神社の太ふじ
まりしじんじゃのおおふじ

庄原市指定の天然記念物

亀山城と要害桜
かめやまじょうとようがいざくら

❿ 白滝山
しらたきやま

⓬ 近江屋最中
おうみやもなか

小奴可駅前の近江屋の名物
「近江屋もなか」

⓫ ノスタルジック!小奴可駅
のすたるじっく!おぬかえき

昭和10年に開業した駅。
かつては急行列車も止まったこともある。

⑬ 奴可神社
ぬかじんじゃ

創建は平安時代初期弘仁3年（813年）、亀山の麓に爾比都売神社として祀られたと伝えられる。室町時代の大永5年（1525年）宮高盛の家臣鳥羽政家（亀割城主）が社殿を改築し、社号を妙見宮と称して篤く信仰した。明治元年太政官達により奴可神社と改め、明治42年に八幡神社、吉備津神社を更に大正元年に天満宮を合併し、大正3年現社殿を建立、大正4年に妙見より西ノ宮の現在地に移した。境内には関西地方では珍しい狛犬がある。

夜神楽（比婆荒神神楽）
よかぐら（ひばこうじんかぐら）

奴可神社では、毎年11月第3土曜日に夜神楽が行われている。
およそ100年前、小奴可地区内の約30の荒神を奴可神社に集めて祀った際、当時の神主が100年の間、毎年神楽を続けることを、夢の中で神々と約束したという。その約束を守り、現在も神楽が続けられている。

⑭ 見性寺

けんしょうじ

創建は応永12年（1405年）。当初は持丸の寺ヶ平に建立され、長福寺と称した。開山（初代住職）は後に京都東福寺の八十世住職となった 岐陽方秀（ぎょうほうしゅう）。開基（財政的な援助により寺を創建した人）は日野城主・伊達基定。その後、高日南山の麓に移されたが、十世元澄の時火災に遭い、享保2年（1717年）徳川八代将軍吉宗によって見性寺と改称された。本尊の千住菩薩観音は行基の作と伝えられ、33年ごとに開扉という秘仏。

旧保育所の近くにある墓

岡の上に建てられた祠

⑮ 小奴可の有名人 目代久兵衛

おぬかのゆうめいじん
もくだいきゅうべえ

延宝年間（1673～1680）小奴可に久兵衛という人がいた。生れは後田上家（かみけ）。長じて麓家へ婿入りし、目代役に取り立てられた。延宝二年、大暴雨洪水により広島領は飢饉に苦しみ、村を捨てる人も多かった。その姿を目の当たりにした目代久兵衛は、藩の許しを得ず藩庫の米を放出したのか、上納米の取立てを行わなかったのかは定かではないが、とにかく民衆の窮乏を救った。しかし、藩（或いは代官、当時西城に代官所があった）は久兵衛を小奴可市場裏のエンバの川原において「打ち首」の刑に処した。藩府より「その処刑待った」の早馬が来たが、時すでに遅く刑は終わった後だった。以来小奴可では「エンバ悪かった」とかの「エンバ」という言葉が使われるようになったと語り継がれている。切り落とされて首は麓家の床の上に帰っていたとか、岡の上に飛び去ったとか言われるが、義民久兵衛の慰霊のため岡の上に小祠が建立された。尚、久兵衛墓所は市場裏の杉の木元にある 。